

教科教育キャリアアップフィールド

家庭科における実習指導に関する研究交流会

家政教育専修 夫馬 佳代子

1. はじめに

今年度も昨年に引き続き、「家庭科における実習指導方法」を12年目研修の課題とした。家庭科教育において、実技・実習は教科の独自性が生かせる授業内容と考えられるが、教育内容の精選、時間削減傾向の中で、中学校では特に被服領域に関連するもの作りの活動は著しい削減対象となっているのが現状である。

こうした限られた時間数の中で、「家庭科における実習の意義」を再確認し、実習体験から生まれる学びを再評価することを本研修の目的とした。

本報告書のタイトルの中で研究交流会と表現したのは、まさしく研修会に参加した先生方が、小学校・中学校・高等学校・養護学校など様々な立場から家庭科に取り組み、そこで生じる問題点などについて意見交換や新たな教材開発や指導のあり方について、相互に学び合うことができ、これが本研修の最大の成果と考えているので「研究交流会」と表現した次第である。

2. 家庭科における実習授業の意義

今年度の研修で、何故家庭科の実習授業をテーマとしたかについて述べたい。家庭科において実習授業は1つの柱であるが、実習授業を通して子どもの如何なる能力を育てることができるのかを、じっくりと検討することが日々の授業では難しいのが現状である。ともすれば、時間に追われ技術の習得や作品の完成に終始してしまう傾向もみられる。家庭科の実習には、他教科では学ぶことのできない生活を創り出す要素も含まれていると考えられるので、再度実習に取り組む意義を見出し、実習を通して育成できる子どもの学びの可能性について討論することをねらいとした。

家庭科における実習授業の意義は、子どもの発達段階や教師の教育のねらいに応じて様々な要素が考えられる。今年度は、子どもが楽しく主体的に学び、自らの生活創造に繋がる実習体験を課題として、以下の5つの視点で実習授業の意義を捉えた。

(1) 実感の伴った体験

家庭科の1つの特徴は「実感の伴った体験」にあると考えられる。例えば、調理実習でおいしく調理できた、あるいは調味料の分量を間違え塩辛かった、被服の小物の製作できれいに縫えた、完成したことが嬉しかった、着用したら着易く暖かった等、全ての実習活動は知識としてのみ受けとめられるのではなく、人間のもつ本能的な実感として受け入れられる。こうした実感を背景として、どうしたらもっときれいに縫えるか、どのように切れば食べ易いか、等の問題解決

に取り組むことに教育的な意味があると考えられる。故に、教師が万全の準備を整え、理想とする完成品に導くのではなく、失敗を恐れない姿勢、問題解決に臨む姿勢を評価することも必要と考えられる。

(2) 生活創造のイメージの形成

家庭科の実習授業では、児童・生徒の家庭を土台として例えば「私の家の味噌汁作り」等、生活を見つめ、交流を通してさらに見つめ直すという一連の課題に取り組む授業がよく見られる。このような、具体的な生活場面を通して、試行錯誤を繰り返し主体的に生活を創る体験を重ねることが、実習授業の意義でもある。個々の生活場면을より自分らしく創りあげる活動を通し、自分らしい生活とは何かを模索することとなる。こうした活動の積み重ねが、主体的に生活の創造に関わろうとする態度を育て、さらに自分らしい生活創造、生き方のイメージの形成にもつながると考えられる。

(3) 確かな技術・技能から生まれる創造性

家庭科の実習を通して、確実に自分が習得したと感じられる「技能」を持つことも、生活の創造に繋がると考えられる。子供の学ぶ意欲を調査した結果からも、自分が「上手にできた」という実感を伴った技能に関しては、家庭の中で応用して活用しようとする意欲に結びつく傾向が見られている。実習授業において、「技能」の習得を如何にして主体的に学びながら定着を図るか等、学習支援の方法を開発することが最大の課題である。

(4) 学校と家庭の連携から生まれる学び

家庭科は、学校での学びを家庭生活にフィードバックし、生きた体験に結び付けることを特徴としているが、家庭にフィードバックした活動を授業の中でどのように受け留めるかが課題である。現在の限られた時間数の中では、家庭における活動を授業で評価する時間もなく、次の題材に追われる傾向も見られる。

学校の学びと家庭の体験を如何にして「連携」させ、子どもが自分の成長を如何にして実感できるかまで見通すことが、実習授業では重要である。こうしたことを踏まえて、実習の授業構想を考える必要がある。

(5) 実習授業だからできる評価方法

家庭科では観点別評価も用いられているが、実習授業では上述の内容とも関連するが、家庭生活における活動も授業の中で位置づけることができるよう、長期的視点での評価も必要ではないかと提案する。こうした授業内の学習活動を評価するだけではなく、家庭での活動の成果を様々な形で受け留める工夫を試みる学校も多く見られる。「授業ではできなかったが、家でやっているうちにこのぐらいできるようになったよ」というような、子供の学びの成長を追跡する評価の方法についても試みられている。こうした新たな評価法について、検討する。

3. 研修会の構成と研修内容

(1) 研修会の構成

研修会の参加者は、最初に述べたように小学校、中学校、高等学校、家庭科専門コースのある高等学校等、対象とする年齢も家庭科で学ぶ目的も異なるが、教師としての立場が異なるからこそ、各々の経験から捉えた家庭科教育における実習授業の意義について、活発な交流ができた。

(2) 研修内容

1) 各学校における実技・実習授業の取り組み（授業紹介）

各学校における、家庭科の授業について、特に実習授業の紹介及び現在の課題について交流した。小・中学校の教育では、家庭科を通して児童・生徒の主体的に生活を見つめる目を育て、人間としての成長を支える教育を柱に授業の構想を考え、具体的な授業の取り組みも紹介されたが、限られた時間の中で学習する以上、何を確実に学ぶかが論点となった。一方で、高等学校の家庭科（専門コース）の目標は明確であり、家庭科（技術）の検定の準備教育としての色合いが濃く、高度な技術を修得するためのプログラムに基づき、実習授業の時間内にどれだけ技術を早く修得するかが焦点となった。また、家庭での実践も学校での学習内容を確認し定着、発展させることが目的となっている。

このように教育の立場により、授業への取り組みの違いが見られたが、共通点として、如何に楽しく、主体的に取り組み、自分の成長を実感できる授業を作り上げるか、如何なる支援をするかが論点となった。専門高校の実習授業では、一見技能の修得に終始しているように受け留められるが、修得した技能を生かした家庭における実践活動の成果は、まさしく創造的な活動と捉えることもできる。今後の課題として、高等学校では確かな技能をもとにした生活創造への発展を、生徒自身が認識できる方法について検討を試みた。

2) 「もの作り」の再体験

教師の立場になると如何に指導するかに重点がおかれ、自ら実習体験の楽しさを味わう時間的ゆとりがなくなるのが現状と思われる。そこで本研究会では、実習活動を自ら体験し、その体験をもとに実習授業で何が学べるか、どのような支援が必要か等討論し、再度授業構想を立てることとした。実習の課題は、各自の自己表現がし易い、創作的活動を選択した。3つの実習課題に共通する点は、「生活に生かす美意識」である。現在の製作実習では、機能性、合理性に重点を置いて指導する傾向にあるが、もの作りの中に楽しさと美意識を見出すことを提案したものである。こうした<ゆとり>の要素は、心豊かな生活の創造に発展するものと考えている。

① 針で表現する創作—「お細工もの」

明治期の学校教育における女子向け教科として設定された「手芸」の教材を復元・体験することにより、当時の物づくりに見られた美意識の育成を体感することとした。現在と同様の「袋作り」の課題であるが、袋の機能性を追求しつつ、花や鳥をモチーフとした形の袋を創り出すという、創作性豊かなあそび心を楽しむ教材である。

② 自由な創作を楽しむ—「ステンシル」

袋作り等の製作実習において、装飾を一部加えることにより、どのような自己表現を楽しむことができるかを体感した教材である。ステンシルは、小・中学校の基礎的技術として扱われる教材ではないが、心豊かな生活の創造につながる楽しみ、美意識を育てる教材として取り上げた。

③自己表現としての創作—「転写シートを用いたデザインシャツ」

上記の2つの課題と同様に、製作実習を通して育てる自己表現と美意識を意図したものである。現在の中学校「技術・家庭」では、私らしい着方として、衣服の社会的役割や衣服のコーディネートを通しての自己表現等、衣服の様々な側面を学んでいる。この題材の自己表

現の要素を発展させ、実際に自分らしさを表現した衣服のデザインに挑戦する課題である。
この課題は、今回の研究会では自由課題とし、各自の意思で取り組むこととした。

3) 子どもの創造的活動の支援方法

前述した実習体験をもとに、実習全体の構想と、製作実習を進める過程で何を学び取るかを図で示した。さらに、実習の過程で、必要と感じる教師の支援内容、支援方法についても書き込み、作品完成とその活用までを含めた授業構想図を作成した。

また、実際の子どもの活動を予測し、この授業構想を通して確実に習得できると思われる知識・技能と、一方で外見からは捉えることのできない学び、つまり内面的な成長も予測して書き入れた。

こうして作成した授業構想図をもとに、教師の支援方法と子どもの学びを受け留めるための評価方法について、意見交流を行った。

4) 諸外国の製作実習の事例

実習体験をもとにした授業構想図を作成するにあたり、諸外国では製作実習の授業において、如何なる教材や指導方法があるのか。教師の支援上の留意点はどのような観点で捉えられているか。これらの点を参考にするため、米国中等教育の被服実習に関する教科書を何冊か閲覧し、また現在日本で調査されている欧米諸国の家庭科カリキュラムの一覧についても解説を加えた。特に、教師の支援方法や子どもを問題解決に導く手順については、参考になったと捉えている。

5) 授業構想の交流

本研究会の最終日には、各自が作成した実習授業構想について、解説を加えながら発表と批評を交わす交流会を設けた。また、今回の研究会での相互の学びが、今後それぞれの立場の授業にどのような面で生かせるかについても意見交換をした。

4. 研究交流会における今後の課題

以上、今年度の12年目研修の課題のねらいと研修の内容について報告したが、教育対象や経験の異なる教師が、同じ教科について交流することは大変相互に意義があることと感じた。

特に、今回の研究会では、小・中学校と家庭科専門コースの高等学校との間に、全く異なる実技・実習授業の教育目標が見られたが、これは家庭科という教科の宿命ともいえる。戦後初等教育の家庭科が男女で創り上げる新たな生活像の構築を背景に、知識・技術の体験学習に取り組んだのに対し、中等教育のねらいは職業教育であり、将来に生きるための高度な専門知識と技術獲得の教育を目指すこととなる。家庭科教育の課題は、小・中・高等学校の家庭科の一貫性であるといわれて久しいが、現実的には、一貫したカリキュラムの作成も難しいのが現状と思われる。それは、むしろ実生活に即した家庭科ならではの特質と捉えることもできる。生活創造の根幹を学び人間としての成長に重きを置くか、職業教育に結びつく高度な技術の修得を目指すか、という2つの側面を含んでいるのが実生活の中で生きている家庭科の特質であろう。

また、教師自らの実習体験をもとにして、生徒の創造性を生かす授業構想を考案し、さらにその内容について相互に活発な意見交換ができたことが収穫であったと思う。互いの経験を生かした意見交流は、まさしく家庭科教育の研究会と位置付けることもできるであろう。

今後の課題としては、今回の研究会では、実技・実習の具体的な評価方法まで検討し、評価票

の具体的作成に結びつけることができなかったが、今回の意見交換を生かして学校の学びと家庭での実践活動を結び付けた評価を考案することが望まれる。また、生活の創造につながる教材開発も、今後の授業の中で是非取り組み、また機会があればその成果について交流することができればと期待している。